

法話

## 日々好日

田坂 牢関

擧こす。雲門 垂語すいごして云く。十五日以前いわは汝なんじに問まわず、十五日以後の一句道どうしやう 将まし来れ。

自ら代にちにちこって云く、日々是こうにちれ好日。

頌じゆに曰いわく

一こきやくを去却ねんたくし七しちを拈得ねんたくす

上下しゆい四維どうひつ 等匹とうひつ無むし

徐おもむろに行いいて踏断とうだんす流水りうすいの聲こゑ

縦ほしいままみに観うつついだて写ひきん出す飛ひ禽きんの跡あと

草茸じやうじやう々ば煙べき霧べき々ば

空くうしやう生が巖ん畔ばん 花ろう狼ぜき藉せき

彈だん指しして悲ししむに堪たえたり 舜しゆん若にや多た

動どう著じやくすること莫なかれ 動どう著じやくすれば三十棒

擧こす。雲門 垂語すいごして云く。十五日以前いわは汝なんじに問まわず、十五日以後の一句道どうしやう 将まし来れ。自ら代にちにちこって云く、日々是こうにちれ好日。

この「日々是れ好日」の語は、禅や茶の湯に関心がある人なら誰でも知っている句であります、この句は「毎日よい天気」という意味ではないし、また毎日が大安吉日でよいことが続いてくれというよう

な甘い願いを込めた句でもありません。

では、その真意はどういうことでしょうか。

英山老大師は、次のように言っておられます。

この「日々是れ好日」の語は誰でも知っている句ですが、さてこの境涯を得ている者が現在の地球上に幾人いるであろうかしら？ 真に自己を欺くことなくして、「日々是れ好日」と言い得る者は恐らくあるまいと申して過言ではないと思います。真に自己の境涯として恥ずることなき人は、そうザラにいるものではありません。それほどこの語は平凡にして、しかも境涯の向上した語なのです。

本則は十五日以前と以後に分けてありますが、これは「悟る前」と「悟った後」というほどの意味にとった方が分かりやすいと思います。次に「一句道将し来れ。」とありますが、「道将」するとは「道<sup>い</sup>持ち来る」ということであり「一句」とは表現というくらいの意味で、意思表示しろということ、「お主らが悟る前にどう生きていたかは問うまい。しかし、悟った後はどのように生きるか。毎日どう過ごしているか。さらに言えば大修行底の生き方は如何<sup>いか</sup>にあるべきか。それについての見解<sup>けんげ</sup>を呈してみよ。」ということです。これは一見簡単なようで、実は容易ならざる問いです。雲門 講座台上から、こう問いを発して大衆を見回しましたが、皆シュンとして一人も見解を呈する者がいません。「衆 対無し」であります。これでは折角の大舞台、幕を下ろすわけにはいかないので、雲門「自ら代<sup>せり</sup>って云く、日々是れ好日。」いかにも名台詞であり、気高い幕切れであります。

この「日々是れ好日」の真意は、どういうことでしょうか。

文字の意味からすれば、「日々是れ好日」とは来る日も来る日も毎日が人生最良の日だということです。しかし、毎日が良いことづくめ、

楽しいことづくめの人生というのはまずありません。「憂き世」とか「苦の娑婆<sup>しゃば</sup>」とか言うように、喜びや楽しみよりも、苦しみや悲しみの方が多いのが人生の実像です。

このことは雲門和尚の場合も例外ではなかったはずで、事実彼の人生行路には順境の時もあれば逆境の時もあったと思います。しかし、彼は頭を上げて「日々是れ好日」と言っているのです。これは、どういうことでしょうか。

我々凡人の日常においても、晴れの日があれば、雨の日もあります。曇りの日もあれば、風の日もあれば、雷鳴轟<sup>とどろ</sup>く日もあります。人生の行路も平坦ではありません。仕事がトントン拍子にはかどる順境もあれば、いくら努力しても一向に埒<sup>らち</sup>があかず、失望落胆する逆境の時節もあります。明るく楽しい時もあるが、暗く苦しく悲しい時もあります。

順境の時には意気盛んで明るく偉そうに振舞っていても、一旦<sup>いったん</sup>逆境に直面すると<sup>たちま</sup>忽ち意気消沈し、青菜に塩のようになってしまうのが多くの人々の常です。これでは凡夫の生き方で、「日々是れ好日」の生き方とは遠して遠してあります。

およそ楽しさや喜びは人生の望ましい味わいですが、苦しみや悲しみもまた避けがたい味わいです。四苦八苦、それは人間が生活している限り付いて回るものです。それなのに苦しみや悲しみを避け、楽しみや喜びだけを器用に味わおうとしても、実際それはできることはありません。

甘い味だけが味ではありません。酸っぱいのも苦いのも味です。味には五味といって、五つの味があるといわれています。「甘」「酸」「鹹<sup>かん</sup>」(注1)「苦」「辛」この五味が微妙に混じり合うことによって我々の食生活が豊かになるのですが、まさにそのように、苦楽悲喜が絡み合

うことで人生の味わいがまた一段と深くなるのです。

このことをよく心に留めて、喜びが来れば勿論これを素直に受けて喜び、苦しみが到来した時は、「これもまた人生の味わい。よ - し、じっくりと味わってやろう。」と積極的にこれを迎えるという生き方、総じて「人生は味わうものなり」という態度で生きる生き方、これが禅者の生き方というものです。

「青山元不動 白雲おの自ずから去来す」という有名な禅語があり、山岡鉄舟居士はこれを 晴れてよし曇りてもよし富士の山 元の姿は変わらざりけり と詠うたっています。晴れようと曇ろうと少しもそれに動かされることなく、むしろ雲の去来によって一段と趣を増す富士の山のように生きること、富貴はもとより風流だが貧賤ひんせんもまた風流、順境は勿論結構だが逆境もまた佳なりというように、ゆとりを持って人生を味わい、生きるということが大切だと思えます。

じゅ いわ  
頌に曰く

こきやく ねんとく  
一を去却し七を拈得す

しゆい とうひつ  
上下四維 等匹無し

おもむ とうだん  
徐ろに行いて踏断す流水の声

ほしいま み うつしだ ひきん  
縦まに観て写出す飛禽の跡

一を去却し七を拈得す 上下四維 等匹無し

例によって本則の主眼をそっくり呈示しています。一とか七とかいうのは、別に数に関係はありません。一は絶対を示し、七は差別を現していると言ってよいでしょう。要は、去却と拈得の方へ眼を向けるべきです。去却は取り去ること、拈得は取り上げることで、元来二つの別個なものではありません。

紙の裏表の如きものであり、ここを第2句で「上下四維 等匹無し」と受けています。全く較べものはありません。「天上天下唯我独尊」ですが、ここは理仏ではなく事仏を言っています。「我今ここに如是」の境涯です。

徐ろに行いて踏断す流水の声 縦まに観て写出す飛禽の跡

次は『寒山詩』の一節を採り持ち来て、この境涯に著語しています。

「徐ろに行いて踏断す流水の声 縦まに観て写出す飛禽の跡」これは初心者に見せる則となっていますが、ここで雪竇が取り出したのは法身辺際の境涯ではありません。これまで取り上げてきた「日々是れ好日」の境涯を詠ったもので、行雲流水の自由の境地と言ってもよいでしょう。何も風光明媚の地を旅行し遊山している時のことを言っているではありません。黄塵万丈の十字街頭にいようが、九尺二間の陋屋にいようが、常にこの行雲流水の境地に遊戯していなければ、「日々是れ好日」とは言えません。

草茸々 煙霧々

空生巖畔 花狼藉

彈指して悲しむに堪えたり 舜若多

動著すること莫れ 動著すれば三十棒

草茸々 煙霧々

「草茸々 煙霧々」とは、いずれもムサムサしいことを形容したもので、取り除く、取り払うということを意味しています。次に述べる真空無相（注2）の誤った見解は取り除けてしまえとあらかじめ抑えておいたのであります。

空生巖畔 花狼藉

この語の出処は、須菩提すぼだいの因縁だいぼんで『大品般若経』に出ているもので、因縁について話すと長くなるので省略しますが、須菩提という人が一人取り澄ました只管打坐しかんたざをするに当たって、真空無相に住することを戒められたものであります。

弾指して悲しむに堪えたり 舜若多

これも同じ意味のことをいったもので、舜若多とは梵語ぼんごで「虚空神こくうしん」と訳されています。虚空を以って体たいとなしている神のことで、これも真空無相を意味しています。

「弾指して悲しむに堪えたり」とは、彼奴きゃつは汚らわしい、見るのも嫌じゃという様子です。須菩提も虚空神も共に見るのも嫌じゃと蹴落けとしてしまったのは、「日々是れ好日」の境涯を真空無相などと取り違えしないよう注意したのです。

動著すること莫れ 動著すれば三十棒

この意味は「その真空無相の穴倉から動き出すなよ！ 出たら承知せんぞ！」と逆手を用いた。ちょうど泣く子供をすかしあぐんだ母親が「エエ！もっと泣け泣け！ 明日まで泣いている！」というのと同じ筆法で「何時までも有う氣きの死人の穴倉に坐っておれ！ 出てくれば三十棒だぞ！」とは逆説法であります。

以上は、雪竇の老婆親切です。

それが「日々是れ好日」の真意です。

私はこのたび、葆光庵ほうこうあん総裁老師より「提唱をやるように。」との御指示を受け、何をやろうかと真剣に考えましたが、あえてこの雲門天子の禅といわれたこの「日々是れ好日」について自分なりに挑戦し、再工夫してみました。実境涯があまりにもずば抜けているため「日暮れて道遠し」の思いがいたしますが、私なりにこの雲門和尚の境涯を

目標に今後研鑽<sup>けんさん</sup>を積んでいこうと思っております。

「悲喜交々<sup>こもごも</sup>」という言葉がございますが、自分が今まで生きてきた道を振り返ってみると、苦しみや悲しみの方が多かったように思います。70～80%が苦勞で、残りの20～30%が喜びや楽しみだったでしょうか……。

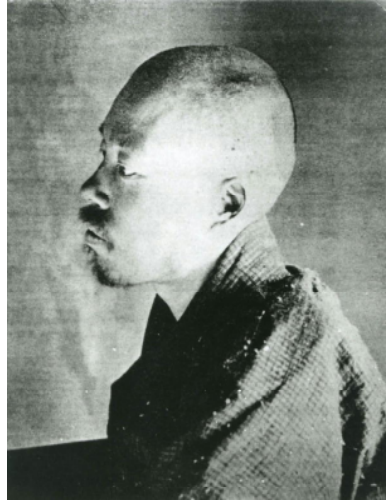
小さいながらも自分で事業を行ってきた関係で、個人の日常生活プラスアルファ<sup>プラスアルファ</sup> + 、仕事での苦勞が何倍も押し寄せてまいりました。また、仕事の上での失敗もたくさんしましたし、今後も生きていく限り、失敗を重ねていくでしょう。

昔読んだ本で、毛利元就<sup>もとなり</sup>が子孫に残した言葉の中に「人生には三つの坂がある。上り坂、下り坂、ま坂、の三つである。」といった内容のものがございました。「上り坂」とはいわゆる順境で、すべて思い通り、計画通りに事が進んでいる時のことです。「下り坂」は、その反対で逆境のことです。やることなすことうまくいかず、「今や落ち目の三度笠<sup>がさ</sup>」「働けど働けど我が暮らし楽にならず、じっと手を見る」という状況です。まあ上り下りは誰にでもあります。が、「ま坂」という坂は、思いもかけない災難を被る時のことです。頭の中が真っ白になり、ハンマーで殴られたような衝撃を受け、呆然<sup>ぼうぜん</sup>自失<sup>い か</sup>の時、如何にするか？ このような体験を数多く重ねるたびに人間は、いわゆる百鍊千鍛され、段々とモノになっていくものです。いわゆる勝って驕<sup>おご</sup>らず、負けてへこたれず、何が来てもヨッシャ、ヨッシャと正面から受け止められる人物が出来上がるのだと思います。

「青山元不動 白雲自ずから去来す」「日々是れ好日」このように生きてまいりたいものでございますが、言うは易<sup>やす</sup>く、実境涯でそこまで到るのは大変なことであります。

最近読んだ本に、俳聖といわれた正岡子規の書いた『病床六尺』という本がございます。この本は、明治35年5月5日～9月17日に書かれた随筆です。

ご存じの通り正岡子規は36歳で逝去しましたが、<sup>せきつい</sup>脊椎カリエスによる激痛にもだえながら、目前に迫る死と向き合いながら書いたものです。しかし、文章から伝わるのは死の影がもたらす暗さではなく、今を生き抜こうとする明るさであります。



正岡子規（松山市立子規記念博物館所蔵）

この子規は、病魔と足掛け8年間壮絶な闘いをしながら、死ぬまで自分を見失わず生き抜いた人であります。この本の中で、【余は今まで禅宗のいはゆる悟りといふ事を誤解していた。悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬることかと思っていたのは間違いで、悟りといふ事は如何なる場合でも平気で生きて居ることであった。】と書いています。

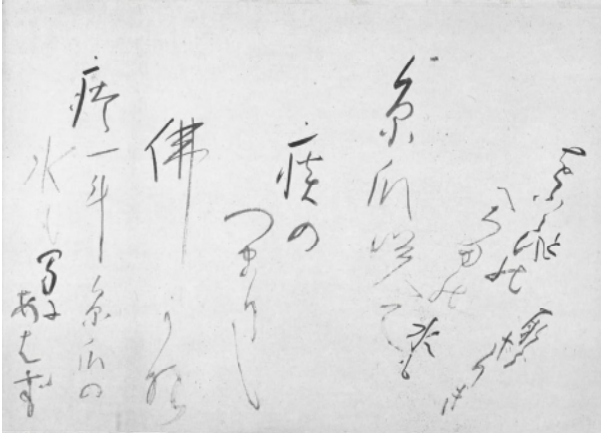
子規が禅の道に進んだのかどうか定かではありませんが、彼が死ぬ以上にきつい難病に長い年月苦しみ抜いて得た境涯は、誠に立派なものだと思います。

死の12時間前に書かれた最後の句です。

へちま たん ほとけ  
糸瓜咲て痰のつまりし 佛かな

別の話になりますが、私が若い頃から尊敬していた、「電力の鬼」の異名を持つ松永安左工門という人物がいます。明治、大正、昭和の3代を生き抜いた大実業家ですが、こういう話を書かれていました。





絶筆三句（複製。協力：松山市立  
子規記念博物館）(注3)

【実業家で本当に大成しようと思ったら、次の三つのうち、どれか一つを経験しなければならない。】

一つは、長い浪人生活（事業に失敗し、次に再起するまでの長い期間のこと）。事業に失敗し、会社を潰せ<sup>つぶ</sup>ば他人または社会から非難され、それに耐えながら次のチャンスまで雌伏する苦しさ、辛さは想像に余りあると思います。

二つめは、大病を患うこと。長い間病床に伏し、苦しみ、悲しみ、生死の間を彷徨<sup>ほっこう</sup>した経験がある人は、我々が計り知れぬほど深い人生観を持っていると思われます。

三つめは、刑務所に入った経験のある者（彼の場合、経済犯罪の容疑で入所し、結果は無罪で釈放されました）。たとえ後日無罪放免になったとしても、入所中の苦悩は大変なものと推察できます。

この松永安左工門先生は、この三つのすべてを生涯のうちに経験した大物で、戦後日本の電力事業再建のため、日本国内の財政界を相手に大喧嘩<sup>げんか</sup>を3年にわたって行いました。世間からは「電力の鬼」と呼ばれ、95歳で大往生を遂げた人であります。

私なんぞは、この三つのうち一つも経験したことがありません。一

つでも経験していれば、もう少しマシな人間になっていたのではないかと考えている次第です。

私がなぜこのような話をするかと申しますと、世間一般の常識では、福を喜び不幸を悲しむわけですが、「人間万事塞翁が馬」と申しまして、長い目で見れば何が幸福で何が不幸なのか分からないものです。

山 高ければ 谷 深し

谷 深ければ 山 高し

天気の日もあれば、雨の日もあるのです。

人々は苦勞を嫌いますが、私の経験では、苦勞している時は成長している時、苦勞は人間の味を増し、悲しみを経験すれば人の痛みが分かるものです。

苦しみも悲しみも真正面から受け止め、<sup>か</sup>嘔み締めれば口に苦くとも、心にとっては何よりの良薬になると思います。

春風に誘われて咲く花もあれば、苦勞の風に鍛われて咲く心の花もあります。順境で分からなかったことが逆境でよく分かるのです。

落ちぶれて 袖に涙のかかる時 人の心の 誠をぞ知る

どのような環境にあっても、この一刻、この一日を精一杯に生きる時、悲喜、苦樂そのままに心が安らぐ。こうなければなりません。

英山老大師が言われたように、真に自己を欺くことなくして「日々是れ好日」と言える境涯の者が現在地球上に幾人いるでしょうか。

また山頭火の詩の中には、次のようなものがございます。

山あれば山を見る 雨の日は雨を聞く

春夏秋冬 朝もよろし 夕もよろし

雲門和尚曰く「日々是れ好日」。

(平成21年6月15日、鎮西支部撰心会の法話より)

### 編集部注

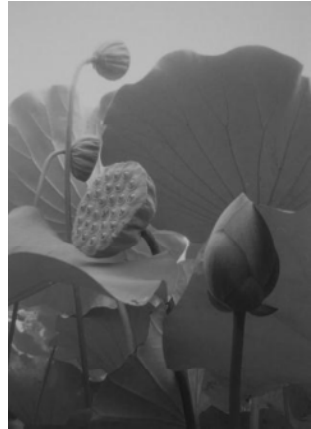
(注1) 鹹：しおからいこと。

(注2) 真空無相：空々寂々の穴倉に閉じこもって一切合切を否定し尽くすこと。「空」は空虚、「寂」は静寂の意である。

(注3) 絶筆三句：をととひのへちまの水も取らざりき (第三句)

糸瓜咲て痰のつまりし佛かな (第一句)

痰一斗糸瓜の水も間にあはず (第二句)



蓮の花 (小寺克彦氏撮影)

### 著者プロフィール



田坂<sup>ろうかん</sup> 関 (本名 / 良昭)

昭和6年生まれ。田坂商事創業後、不二貿易(株)を設立し代表取締役就任。現在、不二貿易代表取締役会長。昭和37年、人間禅立田英山老師に入門。現在、人間禅師家分上。庵号 / 瞎驢<sup>かつろ</sup>庵。